

キリシタン伝説

昭和五七年六月二十日カトリック雪ノ下教会でヒラリオ孫左衛門夫妻他の鎌倉にいたキリシタンの顕彰ミサが行われました。(ヒラリオは洗札名です) 鎌倉にキリシタンがいたことは日本キリシタン史の上では知られた話で、秀吉のバテレン追放令の後も家康は通商貿易の実利を求めて当初キリシタンを黙認していたので江戸幕府を開く前から西日本のキリシタンが江戸の方に移住してきたり、宣教師が関東や東北で布教を始め鎌倉にも立ち寄った記録も残っています。浦賀が開港し浦賀に修道院が出来て浅草の教会や修道院との行き来に交通の要所として立ち寄ることも多くなり信者も増えていったようです。しかし三浦按針の欧州の情報やスペインの宣教師がスペイン船来航の斡旋に失敗したりキリシタンがらみの事件が続いて二代將軍秀忠の時、幕府は方針転換をしてキリスト教禁止令を発令しキリシタン弾圧を始めました。弾圧が厳しさを増していく中、浅草辺りから迫害を避けて鎌倉に移ってきたキリシタンもいたそうです。

一六二五年フィリピンのマニラで発行された日本におけるキリシタンの迫害と殉教の報告書の中に、浅草から鎌倉に訪ねてきた神父と随行者二名がフランシスコ会第三会幹事のヒラリオの家に泊っていた時、浅草で熱心な信者のふりをしていた男に密告をされ鎌倉にも江戸の奉行の配下が来るといふ情報を得て、ヒラリオは三人を小舟に乗せ案内者も付けたけれど、案内者が自分も捕まるのを恐れ途中で路銀を持ち逃げしたため、三人が途方に暮れていた時に見つかって捕まり、宿主のヒラリオ夫妻も捕まって一緒に江

戸に連行されたことや、後に江戸大殉教と呼ばれる、一六二三年十二月四日に江戸の南の入り口、芝札ノ辻でキリシタン五一名の火あぶりによる処刑が行われ、その人たちの中にヒラリオ孫左衛門がいたことが書かれています。同じ年の十二月二四日、二九日にもキリシタン二四名とその援助者十三名の処刑が行われ、ヒラリオの妻マリーナも火あぶりの刑にされたそうです。

鎌倉キリシタン顕彰会によると、ヒラリオ孫左衛門は小袋谷村に住んで居たそうで、捕まるまで小袋谷村辺りに九年程あつたとされる伝道所の責任者だったそうです。ヒラリオ夫妻の処刑から三〇年以上後に、宗門改役が鎌倉から五、六人のキリシタンが送られてきたと記録しています。このキリシタンたちも顕彰会は小袋谷村辺りに居たとしています。今、一六二三年に処刑が行われた札ノ辻の近くの刑場跡には、元和キリシタン遺跡の石碑が立っています。また、カトリック雪ノ下教会聖堂の一角には顕彰を記念した三枚の絵が掛けられています。